

すぐろくをまいらば、これも袋を取て石をうつして、筒をも貴人へまいらすべし。又貴人の石をさのみかへる事も、さいをこふ事も尾籠なり。さやうの事は、時により様によるべし。分別有べし。〔古今著聞集十四〕小野宮は、むかし惟高のみこの雙六のまちに取給へる所也。かのみこは、たのしき人にてなんおはしましける。むかしもかゝる輕々の事は有けるにこそ。

〔紀長谷雄物語〕中納言長谷雄卿は、學九流にわたり、藝百家に通じ、世におもくせられし人なり。或日ゆふぐれがたに、内へまいらんとせられける時、見もまらぬおどこのまなこゐかじこげにて、たゞ人ともおほえぬ來て云、つれづれに侍ば、雙六をうたばやと思給に、そのかたきおそろくは、君ばかりこそおはせめとおもひよりて、まいりゆるなりといへば、中納言あやしうおもひながら、心みむと思ふ心ふかくて、いと興あることや、いづくにてうつべきぞといへば、これにてはあしく侍ぬべし、わがゐたる所へおはしませといへば、さらなりとて、ものにもものらず、ともものをもぐせず、たゞひとりおとこにまたがひてゆくに、朱雀門のもとにいたりぬ。此門の上へのぼり給へといふ、いかにものぼりぬべくもおほえねど、男のたすけにてやすくのぼりぬすなはちばむてうどとりむかへて、かけものにはなにをかし侍べき、われまけたてまつりなば、君の御心に、みめもすがたも、心ばへも、たらぬところなく、おぼさむさまならむ女をたてまつるべし。君まけ給なばいかにといへば、我身にもちともたらんたからを、さながらたてまつるべしといへば、まかるべしとてうちける程に、中納言たゞかちにかちければ、男まばしこそよのつねの人のすがたにてありけれ、まくるにまたがひてさいをかき、心をくだきける程に、もとのすがたあらはれて、おそろしげなる鬼のかたちになりにけり、おそろしとおもひけれども、さもあれ、かちだにしなば、かれはねすみにてこそあらめとねむじてうちける程に、つゝに中納言かちはずにけり。